

アイヌ民俗文化財
ユーカラシリーズ 7 1

金成マツ筆録 アイヌ叙事詩

メナシサムの厚司メナシサムの帽子（2）

Menashsamun Attush Menashsamun konchi

蓮池悦子 訳

北海道教育委員会

メナシサムの厚司メナシサムの帽子 (2)

Menashsamun Attush Menashsamun konchi

メナシサムの厚司メナシサムの帽子 (2)

蓮池悦子 訳

目 次

凡例と解題

〈物 語〉

第 I 部 私の暮らしの語り

第 1 章 山頂での暮らし	11
第 2 章 生活の中で	12
第 3 章 カムイノミ	13

第 II 部 神々の村での戦

第 4 章 争いの発端	14
第 5 章 戦さの火蓋が切られる	16

第 III 部 舟上の出来事

第 6 章 舟上の神変	18
第 7 章 狐神の仕業	21
第 8 章 ようやくの帰着	22

第 IV 部 酒宴と平穏な生活

第 9 章 メナシサムの厚司メナシサムの帽子	23
第 10 章 酒宴の始まり	25
第 11 章 結ばれる一族	26
第 12 章 宴の終幕	27
第 13 章 夫婦となる二人	28

第 V 部 私の生涯の語り

第 14 章 一族のウバシクマ	30
-----------------	----

〈本 文〉

第 I 部 私の暮らしの語り

第 1 章 山頂での暮らし

1-1 山頂への道	35
1-2 山域に到着する	35
1-3 美しく若き女性	36
1-4 可愛い妹	37
1-5 素晴らしき住まい	38
1-6 オタサムびとの提案	39
1-7 もてなしと拝礼	40
1-8 眠れぬ夜	41
1-9 一晩中の涙	42

第2章 生活の中で

2-1 若い女性の働きぶり	44
2-2 オタサムびとの疑念	44
2-3 私の内省	46
2-4 家事にいそしむ	48

第3章 カムイノミ

3-1 カムイノミの始まり	49
3-2 並ぶ酒宴の座	49
3-3 和人の酒を嗜む	50
3-4 宴の終わり	51
3-5 深い眠りにつく面々	51
3-6 昼の叱責への思い	52

第II部 神々の村での戦

第4章 争いの発端

4-1 目が覚めると洋上に	54
4-2 神々しき者の顕現	55
4-3 驚嘆する私	56
4-4 クロラニびとの語り	56
4-5 拐(かどわ)かされる二人	58
4-6 神との婚姻の提案	59
4-7 怒りと悪態	60
4-8 痛罵に思い馳せる	61
4-9 抵抗むなしく	62

第5章 戦さの火蓋が切られる

5-1 戦さの前兆	64
5-2 燃えるクロラニ村	65
5-3 襲撃に憤るクロラニびと	67
5-4 神々への口上	69
5-5 鏑迫(つばぜ)り合い	71
5-6 神々への祈り	73
5-7 解放される二人	74

第III部 舟上の出来事

第6章 舟上の神変

6-1 帰路へ向かう小舟	75
6-2 豪奢(ごうしゃ)な若者の顕現(けんげん)	75
6-3 若い女性の出立ち	77
6-4 告げられる伝言	78
6-5 クロラニ村での顛末(てんまつ)	78
6-6 凶行の原因	80
6-7 黄泉へと送られる悪神	83
6-8 村での暮らしの契め	84

6-9 受け入れる二人	85
6-10 家族となった面々	86
6-11 喜び合う一同	89
第7章 狐神の仕業	
7-1 再びの出航	91
7-2 解ける誤解	91
7-3 悪しき狐神への思い	92
第8章 ようやくの帰着	
8-1 住まいへの帰着と休養	95
8-2 暮らしの中で	96
8-3 宴の準備	97
8-4 オタサムびとの手捌(さば)き	99
8-5 カムイノミの口上	100
8-6 迎えられる神々	101
第IV部 酒宴と平穏な生活	
第9章 メナッサムの厚司メナッサムの帽子	
9-1 豪華な厚司、綺羅びやかな帽子	104
9-2 体調を憂う私	105
9-3 慎み深きイヨチ姫	106
9-4 流暢な弁論	107
9-5 感謝し合う一同	108
9-6 私の無事を祝う育ての兄	110
9-7 育ての兄の詳述	111
第10章 酒宴の始まり	
10-1 盛大な酒宴	113
10-2 主賓の案内	113
10-3 酌と先祖供養	114
10-4 楽しい酒宴	114
10-5 酒宴に感心する神々	115
第11章 結ばれる一族	
11-1 親類となり飲み食いし合う	117
11-2 義姉と喜び合う私	118
11-3 クロラニびとの語り	119
11-4 喜び妻を迎えるイヨチびと	121
第12章 宴の終幕	
12-1 私へと詫げるオタサムびと	124
12-2 兄から受ける酌	126
12-3 兄の謡う酒盛り歌	128
12-4 婚約者の美しき歌舞	128
12-5 宴の終わり	129
12-6 女性だけの語らい	130

第13章 夫婦となる二人

13-1 新築の祝い	132
13-2 三人きりになる	133
13-3 婚約者との食事	136
13-4 真の夫婦となる	137

第V部 私の生涯の語り

第14章 一族のウバシクマ

14-1 平穏無事な暮らし	139
14-2 談笑の絶えぬ日々	140
14-3 子を授かる	141
14-4 親孝行な子ら	141
14-5 年老い、孫に囲まれる	142
14-6 語り継がれるウバシクマ	143

(了)

凡例と解題

本ユーカラは原ノート208頁に筆録されており、本書は後半108頁を『メナシサムの厚司メナシサムの帽子(2)』として刊行したものです。金成マツの筆録年月日は不明です。

また、原ノート p.1 冒頭には「Menashsam un Attush Menashsam un konchi menoko yukara」と本ユーカラのタイトルが記されております。最後の menoko yukar (婦人のユーカラ) はく女性が一人称で語るユーカラ>の意味ですが、本書の表題では割愛させていただきました。

1. 編集要綱

- ① 物語の大意を把握するために「物語 メナシサムの厚司メナシサムの帽子(2)」をつけました。
- ② 本文では原文にはない章立てを入れ見出しをつけました。
- ③ 叙事詩の1行を4段に分け、以下の要領で整理翻訳しました。

「一段目」…ローマ字原文	l- resu yubi
「二段目」…片仮名	イレス ユビ
「三段目」…分解訳	我を・育てる その兄
「四段目」…対訳	育ての兄

【一段目】…ローマ字原文

- (a) 叙事詩のリズムに合わせ、1行が4音節ないし5音節に収まるよう行を改めました。但し、金成マツの文体はしばしば1句が6音節以上になることがあります。
- (b) 各行には、行数番号をつけ、原ノートの頁は本文の欄外に記しました。
- (c) 原文は人称接辞を中心に大文字で筆録されることもありますが、大文字の使用を文頭と固有名詞の頭に限定し、そのほかの大文字はすべて小文字に換えました。
- (d) 原文では人称接辞は人称語幹と結合されて示されていますが、本書ではこの境界にハイフン「-」を挿入しました。
- (e) 原文にはピリオドやコンマなどがほとんど用いられていません。本書では句読法を指示するピリオド「.」、コンマ「,」、コロンの「:」「”」などを適宜補いました。
- (f) 語、助詞はその境界で切りました。ただし、助詞が連続する際はこの原則に従わないこともあります。語、助詞などが空白や改行によって途中で切断している場合はそれらの断片を結合しました。
- (g) 長大な動詞が2行にまたがるときは、1行目の末尾にハイフン「-」を補いました。
なお、金成マツの綴り方については、金成まつ 筆録/金田一京助 訳注『アイヌ叙事詩 ユーカラ集 I』(1959年 三省堂 刊行) p.19~20「V原テキストのアイヌ語」をご参照ください。

【二段目】…片仮名

- (a) 本書の片仮名はふりがなを意味しません。アイヌ語音声テキストにおける片仮名表記は耳に聞こえるとおりに表記することが一般的ですが、本書では一語を分解してそれぞれ半角空きに整理しました。
例—イレス

(b) 金成マツの音声資料はきわめて少ないのですが、金成ノートにおけるローマ字には筆録者の発音が反映されていると推定される箇所もあります。その場合は原綴の読みをそのまま片仮名表記し(←)内に語源分解しました。原綴で二語が一語に綴られている場合は、語間を全角空きにしてそれぞれ半角空きで語源分解しました。

例一原綴 taninne

[一段目]…tan inne

[二段目]… タニンネ(←タン インネ)

[三段目]… この 大勢の

[四段目]… この大勢の

【三段目】…分解訳

ユーカラで使われている言葉＝雅語は語源分解してこそ言葉の意味の面白さが味わえます。本書では片仮名の下段に半角空きで語源分解訳をつけ、人称接辞と語幹の間には「・」を入れました。

例 原綴 Aniyeresu

[一段目]…an-i-y-eresu

[二段目]…アニエレス(←アン イ エ レス)

[三段目]… 人々が・我を・そこで育てる

[四段目]… でわたしは育てられた

注： 本書の chi+動詞+re の分解訳では、他動詞構文で自動化する接頭辞 chi-を<自身に>と訳しています。[参考：「chiibiyere (脚注：shi- 自分に通う chi- と、使役の -re とで、chi-ipiye-re-ipiye つまる、ぎっしり詰まっている)(金I-53)」「自身に～をさせるー自身が～をする」と解釈した方が、あらゆる現象や事物に靈魂の存在を認めるアニミズム的表現ではないかと考えるからです。

また多出する chi-～a-i-ekarkar の chi- は次に来る句を名詞句化する接頭辞ととらえ、次句を a-i-ekarkar<人が、誰かが・我に・～をする>ー我は誰かに～される>と解釈しています。

【四段目】…対訳

一語としての意味は対訳でわかるよう心がけましたが、分解訳を併記してあるので、しばしば意識していることがあります。

2. 脚注と引用文献略記号

訳註に引用した文献の略号と数字は以下の出典と頁です。

研 金田一京助著『ユーカラの研究二』(東洋文庫 1931) 幌別方言話者金成マツ口述・金田一京助筆録

研W 前掲書のうち、日高、沙流方言話者鍋沢ワカル口述・金田一京助筆録のもの

B ジョン・バチェラー著『アイヌ・英・和辞典第四版』(岩波書店 1938)

金I～VIII 金成まつ筆録/金田一京助訳註『アイヌ叙事詩ユーカラ集』I～VIII(三省堂 1959～1968)

植 知里真志保著『分類アイヌ語辞典植物編・動物編』(『知里真志保著作集別巻I』平凡社 1976)

人 知里真志保著『分類アイヌ語辞典人間編』(『知里真志保著作集別巻II』平凡社 1975)

地 知里真志保著『地名アイヌ語小辞典』(北海道出版企画センター 1984 復刻、初出；1956)

語法 知里真志保著『アイヌ語法概説』(『知里真志保著作集4』平凡社 1974、初出；1936)

教 1～28 金成マツ筆録／蓮池悦子ローマ字翻刻片仮名整理／萱野茂分解訳と和訳『アイヌ民俗文化財ユーカラシリーズ』 I～XX、21～28(北海道教育委員会 1979～2006)

教 29・31・34・37・40・45・46・51・54・57・60・63 金成マツ筆録／蓮池悦子訳『アイヌ民俗文化財ユーカラシリーズ』 29～31・34・37・40・45・46・51・54・57・60・63(北海道教育委員会 2007～2019)

教 32 金成マツ筆録／高橋靖以・切替英雄・蓮池悦子共訳『アイヌ民俗文化財ユーカラシリーズ』 32(北海道教育委員会 2009)

聖 久保寺逸彦編著『アイヌ叙事詩 神謡・聖伝の研究』(岩波書店 1977)

久 久保寺逸彦編『アイヌ語・日本語辞典稿』(道教委 1992)

萱 萱野茂著『萱野茂のアイヌ語辞典』(三省堂 1996)

田 田村すず子著『アイヌ語沙流方言辞典』(草風館 1996)

中 中川裕著『アイヌ語千歳方言辞典』(草風館 1995)

《藤村説》藤村久和(北海学園大学名誉教授)解説・解

物語 メナシサムの厚司メナシサムの帽子(2)

第I部 私の暮らしの語り

第1章 山頂での暮らし

1-1 山頂への道

p.101 そのとたんに青年たちや娘たちが笑みを浮かべてほんとうに喜びながら押し合いへし合いしながら浜に出てきて、そのあいだに、神のようなお方は金時きんとき絵えの行器ぎょうきひとそろいを手に持ってわたしを手招きしました。まず先に彼が上陸し、ゆったりとした歩みで片手を振っています。頂上が少し平らな険しい岩山の上から浜手に下る大路が幾重にも肘のように、何重にも折れ曲がった道が幾重にも九十九折りに折れています。そのようだからその道を通ってあとへすぐびったりわたしは付き従いました。

1-2 山城に到着する

険しい山頂にわたしが到着して見ると、この大きな家、この大きな山城が重なり立っており、外観を美しく飾り付けられて何から何まで美しいその様につくづく感心しました。慎み深いわたしですから、山城のわきにわたしの嫁入り道具を置き、p.102 そのそばで髪の毛の裾はしをわたしは床ゆかにつけてかしまって座っていました。

1-3 美しく若い女性

神のようなお方は屋内に入り、その次にどなたかとあいさつの礼をかわすらしい声がかしてから、少し経つとどなたかは胸の玉飾りをチャリンチャリン鳴らしながら駆け出し外に飛び出してきました。見ると、霞の丸い小山が静かに寄ってきました。そのもやを眼力でもってうち払ってわたしが見ると、若い女性なののでしょうか。この年ではほんの少しわたしより年下くらいのように見える方が大切に育てられ美しく育てられた者にちががなく、神々しい刺繍着や色とりどりの豪華な刺繍着を襲ね着し、それこそ耳や胸元には神々しい耳輪や首飾りをぞっくりとつけ、美しい髪の毛は絹糸のようにその頭上に広がっておおいかぶさっています。

1-4 可愛い妹

p.103 オタサムびと神のようなお方と目つきや眉つきがそっくりそのまま、どうともこうともこれ以上ほめる言葉も見つからないほどの美しさです。わたしに眼を向け、わたしを包む濃いもやの真ん中に向かってわたしのもやを散らしました。こんなにも美しいご様子のお方がご自分をさしおいてあべこべにそれこそわたしを称賛するようにわたしを見て、「お姉さまあ」と言って、わたしの腕の中に飛び込んできました。そうするから、なおさらなつかしく親しい気持ちをおぼえ、「可愛い妹よ、いとしい子よ」とわたしは言いながら、彼女を抱きしめ、かわるがわるわたしたちは頭から腕にかけて撫でさすり合い手を取り合ってあいさつの礼をかわし、泣きながら喜び合いました。それから彼女はわたしの手をとって、わたしの荷物を背負って入り口の土間に入って行きました。

1-5 素晴らしき住まい

入り口上間の所で家の中から神の香気宝器の芳香が烈風のようにわたしたちをたじたとあどさきさせました。母屋入り口のすだれ p.104 に手をかけてフワリと揺るがし、内上間にわたしたちはサッと入って行きました。家の中深く黒いもや白いもやがいっぱいにみちあふれていて、もやの中に炉のたき火がピカッと光っているようです。左座に彼女はわたしを座らせました。少し経つともやが薄れました。頭を深く垂れ、行儀よくかしまっていたけれど、髪の毛のすきまからそっとのぞいて見ると、まあ驚いた!わたしの住まいやイヨチの神のようなお方のお住まいもこれほど立派な館は遠近を探してもあるまいと思っていたのに、それに優るか、同程度の美しさでしょうか。この大きな家の調度品が何から何まで美しく飾られているようすはあまりにも素晴らしい。宝壇そばに一段高くつくられた立派な台座が伸びており、神のようなお方がその上に座っていました。

1-6 オタサムびとの提案

p.105 それから大勢のひとたちが家の中のいろりと東窓の間の上座いっばいに酒などを運び入れ、神

のようなお方が言うことには、「これこれ、我が同族たちよ。すぐにでもカムイノミ（神々に御神酒を捧げ祈禱する）をしたいのだが、あまりにもわれはくたびれすぎている。それゆえ二口ほどたったら倭人の酒でカムイノミを本当の一族だけでしてから、もう少したってから、真のアイヌ風の本式の酒を醸すことにしよう。そこに 遠方のわが親戚身内たち近隣近在の親戚身内たち全部招待して本式のカムイノミや先祖供養をするつもりである」とおっしゃったから、人々はほんとうに喜びながら外に出てきました。

1-7 もてなしと拝礼

若い女性は本当に喜びながら心をこめて煮炊きにかいがいしく立ち働き、*p.106* 山盛りの高盛飯を宝壇そばでうやうやしく高く持ち上げ、山盛りの高盛飯をわたしに捧げました。わたしは拝礼して食べました。左座に若い女性がわたしの寝床を心地よく整えてわたしを横たわせました。そこにいた人々も寝ました。

1-8 眠れぬ夜

わたしはなかなか寝つけません。依然として育ての兄さまがあのように言い、あのように振る舞ったことを思い出すと、わたしは恥ずかしく思いもし、非常に腹が立ちとても口惜しい気がして、兄を恨むあまり食べ物の味もわからない。どうにかしてここへわたしが来る前にわたしのくされ兄に会ってわたしは泣いて怒りつけ、ていっばい悪態をつき不満をぶちまけて少しはいい気味だ(?)とばかり思っていたのに、あの育ての兄さまがもっとも悪い行いをしたことに、それこそなおさら私は気分を悪くしました。イヨチびと *p.107* 神のようなお方がいらっしゃらなかったなら、今このようにわたしは生きてはいないで、とっくに悪い死に方ひどい死に様をしてしまったでしょう。イヨチびとがこのようにわたしの命を取り戻したことを、育ての兄さまやオタサムびとにまったく少しも聞こえておらず、知らないことがなおさらわたしは腹立たしい。おおわれ、うら若いむすめの肌隠れている肌あらわにされたこと、イヨチびと他族の若いお方に命を救われたことをわたしが思い出せば、もうどうしていいかわたしはわからない。オタサムびと わたしの婚約者がいらっしゃらなかったなら、イヨチびと神のようなお方以外の所に(?)わたしは跳んで行くものか

しら(?)まったく自分の(?)気持ちが(?)はっきりしているから(?)なおさらわたしはそれが不満です。

1-9 一晚中の涙

どんなにかまあ今夜一晚じゅう(?)*p.108* 若者の気持ちというものはこのようなものだから、自分の気持ちが晴れないでもやもやしているのかしら?ただの一度すらも、若い者どうしでうぶなわたしたちですから、お互いに言いたいことも言えずに言いそびれているうちにわたしたちが別れてきたことを本当にわたしはもの足りなく思い、感謝の言葉すら思い通りに(思いの丈を)言うのものはばかれる(勇気がない)といろいろさまざま千々にわたしの心は乱れ、わたしは涙をしとどに流していました。そうしているうちにほんのすこし眠ると夜が明け、若い女性が起き出しました。

第2章 生活の中で

2-1 若い女性の働きぶり

なんとまあよく働くことでしょうか。はき掃除する音が元気よくサッサッと聞こえます。わたしが起き出してお手伝いするのがいいのかしないほうがいいのかしら?—とわたしは心の中で思いめぐらせ *p.109* ていました。

2-2 オタサムびとの疑念

そのとたんにまさかまあそんなことが聞こえるとはわたしが聞くとはい思わなかったのに、寝台の上にパッと跳ね起きる音がして、怒号のことばが突き刺すように斬りつけるように、「ああいやだ!(おのれ小癪千萬な、忌々しい) おおいやだ(小生意気な、憎らしい) ポンテセウ姫、わが愚かな妹の振る舞いが怪しいのか(?)何かこれから悲しいことをしたから(?)昨日も甲板で何であのようにそなたが泣いていたのか、われが知らないとも思っていたのか?ゆうべ一晚じゅう何とそなたの泣き声がまあうるさかったなあ。イヨチびとをそなたが恋しく思うのであるなら、さっさとイヨチに行って連れ添おうと考えよ。そうであれば(そんなことで?)争い無しに戦いもなくそなたは結婚できると思っている(?)のか?イヨチびとあんなにもまあ雄弁な *p.110* 族長であるから神のようなご決断見事な精神のいいお方であるゆえ、たくさんのよきことを言ったそのこと

をお互いに話し合意して別れてきたことをそなたは忘れ(?)そなたが知らなかったから、このようにそなたのくされ兄(?)の決めごとの(と約束した?)いきさつを恥ずかしいやら情けないやら思っただけはあやまります。イヨチびとが悪い精神の持ち主ならばポンテセウ村に戦いがないものなのか?恥ずかしくもなく(恥ずかしいとも思わず)(?)どこまでも兄弟同志で気をもませ、われに気苦労させるのがこのようなことなのか?死にたくてくたばりたくてあえておそれはばかることをわれにせぬことがこのようなことなのか。わが可愛い妹が起き出してはき掃除する音がそなたは聞こえないのか? *p.111* 女性は何ごとでも手伝いあってするものであったが、今日からわれはカムイノミをしてそれで安心しようと思っていたのに、このように何かこうそなたが悲しんでいると、われにしてもいい思いで神に祈れないにちがいない。さあ妹が起きたから、そなたの愛いのわけを言いなさい。聞いてやろうぞ」とおっしゃったから、ただ聞くだけをしたのだけれど何をどう本当にわたしがしたらいいのか(?)わからないほど非常にわたしは驚き、いっそう恥ずかしい気持ちがわいてきました。

2-3 私の内省

なるほどああそうか、オタサムびとが言ったとおりだ。オタサムびとのキツネに関する話は少しも覚えがないことなのだから、あのように彼が考えることはそもそも(?)わたしが本当に悪いのだけれど、*p.112* 育ての兄さまがいちばん(?)もう今はいつも運が悪いわたしですから、このように悪くなるようにばかりわたしは思ってしまうようです。何の悪い精神もわたしは持っていないのであることを神のみがご承知でございましょう。それゆえこれからはもう泣くまいとわたしは思いました。甲板で後ろを向いてわたしが涙を流していたことも、イヨチびとはわたしの方を見ていないようであったのに、ひょっとしてそれを見聞きし(?)、その上さらにゆうべわたしが忍び泣いていたことも、遠くで(近くもないところで?)かくかくしかじかの事をただ聞いただけで(?)そうおっしゃったから、心底おどろいてしまいました。すっかりこりたわたしはこれから気をつけようと *p.113* 心の中で自分の気を奮い立たせていました。

2-4 家事にいそしむ

若い女性はたいへん驚いたものだから、息を詰めて身を固くしています。ゆっくりとわたしは起きあがり、にこにこ笑いながらはき掃除や炊事などを手伝いました。それから「可愛い妹よ」と若い女性にわたしが呼びかけたら彼女はほんとうに喜び、『お義姉さまあ』とわたしを呼びました。わたしの婚約者が起き上がりました。わたしの方を見たのか見なかったのか、慎重なわたしですから、顔をあげることにすら出来ません。

第3章 カムイノミ

3-1 カムイノミの始まり

わたしの婚約者は窓から上半身を乗り出して、自分の村のかみでから下端に向かって声高に叫びました。「もうすっかりわれは元気になったから、一刻も早くやって来て手を貸してくれ。さっそく、カムイノミをしようぞ」とおっしゃったから、また何とまあ *p.114* 一家の主人たちは聞きわけがよかったことでしょうか。大勢のひとたちが集まり出てきて、カムイノミをすべく、さまざまな事柄を協力し合って、たちまちのうちに準備が出来上がりました。

3-2 並ぶ酒宴の座

さてそれから一家の主人ばかり奥方さまたちばかりが酒宴の正装を重ね着して屋内に入って来て、ざらっと酒宴の座が並びました。わたしの義妹は酒宴の正装をぞっくり重ねてなおさら神のように美しい姿になって、手に持つ片口の銚子を自分の胸の脇にささげ持って宴席のあいだをあちらこちらまわって酌をしていました。

わたしの婚約者が右座の方の端に家の主人として座りました。わたし自身は左座にいる女性たちの間に仲間入りして座りました。 *p.115* 奥さまたちは本当にわたしに親愛の情をこめて、わたしの手を取り、さすり合う初対面の挨拶をしました。洋々とした酒宴が打ち開けました。

3-3 和人の酒を嗜む

女性が飲むお酒はまた別です。たった今はじめて倭人が飲む酒とやら言うものをわたしが飲んでみると、何とまあ美味しかったことでしょうか。ほんとうにわたしはいい気持ちになりました。一家のある

じたちも婦人たちも本当に喜んでいます。結構な御神酒はまことに濃いものだから、一座のひとびとはおおいに酔っぱらい、そしてさっそく感謝して何十回もの拝礼をたくさん重ねました。

3-4 宴の終わり

女性たちの席には土産用に飲み残された酒だのいろいろ倭人のおいしい甘いお菓子などがどっさり土産物に配られて一同が帰宅し終えました。その後はわたしたち一人きりになりました。

3-5 深い眠りにつく面々

わたしの婚約者もすっかり酔ってしまったものだから、両腕の間に *p.116* 首をたれてこっくりこっくり居眠りしているから、わたしの義妹は高床むかの上に入りっぱな寝床を敷き延べてから、神のようなお方の手をとって休ませました。横になるやいなや、いびきをかく音がググググウ。わたしたちも酔ってしまったのでしょうか。この大きな家がわたしたちの上へ傾きかしがって来て、そこをわたしたちが踏みつけて(?)よろよろふらふら、もう少しで重なり合って(?)ひっくり返りそうに(?)なり、わたしたちはクスクス笑いをし合って、すっかり疲れてしまったので、今夜ぐっすり眠ってから、明日しっかりと掃除することに決めました。

3-6 昼の叱責への思い

義妹はそれこそ今日まだ暗いうちから兄ぎみがおだやかでなくわたしをののしることばを本当にわたしに対して気の毒に思っているものだから、*p.117* わたしの方を見て、(?) (?) 本当に心の中で心配していることがはっきりわかりました。わたしも気持ちの上では泣き死にしていまいそうでしたが、ぐっと我慢しました。どんなに悔しい思いや腹立たしい思いをしたとしても、これからはもう泣くまいとわたしは自分自身で決意したのだから、勇気を出して、寝床へ深くパッと潜り込みました。夕べから眠れなかったものだから、すっかりくたびれ、しおれた草のようにわたしはパタッと倒れ伏し、それっきりぐっすり高いびきをかいて正体もなく眠り込んでしまいました。短い間だったのか長い間だったのかわたしは眠りこけ、何かの音にわたしの心がぐるぐる回って意識朦朧となり、その音の合間に幾度も幾度も目がさめようとしては覚めきれないで、うつ

らうつらと夢ごちちになって気が遠くなってしまいます。

第Ⅱ部 神々の村での戦

第4章 争いの発端

4-1 目が覚めると洋上に

p.118 そうやっていて、どれほどたってかわたしは正気に返りました。まさかまた状況がそうなっているとは、そんなものを見るとは思わなかったのに、空中の雲の上でわたしは目を覚ましたのでした。沖に向かって金の小さい帆掛け船が舳先にあたる波をザアザア蹴立てて、まるで矢が飛んでいく槍が飛んでいくさながらに波の上を一直線にサーッとすべっていく音でわたしの耳元に風がうずまき起こる。絹の帆が帆柱をたわませ、帆の下っ腹をふくらませています。帆柱の中央に金の紐でわたしはしっかり縛り付けられ、わたしの下にまたわたしの義妹が！帆柱にわたしの義妹がしっかり縛りつけられていて、そこにわたしは正気づいたのでした。と同時にまたわたしの義妹も正気に返りました。見ると、へさきの側に丸いもやの塊が *p.119* ともがいで水をかき回し水をかき返すその度に身体を後ろにぐっと反らしています。そうするから、見るともなしにわたしがそのもやを散らして見ると、わたしの目の先がさっと届きました。

4-2 神々しき者の顕現

年若いお方なののでしょうか。一歳ほどオタサムびとより少し年上らしく思える者が、金糸銀糸の豪華な衣装中から外まで同じようなよい小袖のみを襲ね着し、かなぐさりのベルトを胸に締め、神からさずかった太刀でもって脇の下あたりがきらびやかです。金色の兜のその垂れひもでご自分の顔をきりりと緊め、兜の縁からは神々しいお顔が明るく輝いています。勇者らしいおもぎしで顔つきがきりりとしており、どうにもこうにもほめる言葉もないほどの美しさです。わたしが密かにうかがい見ると、まったくもってありきたりの *p.120* 人間のお方ではありません。神であるらしいことが衣装の様子や容貌に現れている様子でわかりました。

4-3 驚嘆する私

それを見ただけであつたけれど心底驚き、猛烈に腹が立ってきました。どこの国の者かどこの村の者が居るにもことかいてとんでもなく振る舞うこと、まったくそれまでぐっすり寝込んでいたせい、このような目に合わされ、どこの海どこの沖なのか、遠くなのか近くなのかどこかへ誘拐されてきたことまでもぐっすり寝込んでいたことも、それこそまた恥ずかしいやら情けないやら思っていました。わたしと同じように義妹もそう思っているらしく、ただ頭だけを動かしてわたしを見上げ、お互いに目を見合わせて心底驚き合いました。

4-4 クロラニびとの語り

p.121 本当にわたしたちは驚いて、もうどうしていいのか縄から出ようとする身動きさえできません。まさに小石縛りにされているものだから、少しも動くことも息することさえできないほどです。どこかの村の者はいっせいにわたしたちの方に目をやり、わたしたちを褒めるのであるならいいのに、わたしたち二人を隅から隅までじっくり観察しました。わたしたちの顔は直視せず目を伏せて、笑みを浮かべながら、彼らの言葉でその喉を美しく響かせ、言う声がこうあるには『これこれ、人間のお若い淑女たちよ。われらの言うことをよく聞いてください。われらは人間ではありませぬ。はるか遠い *p.122* わが村の名はクロラン村であります。神から天から降ろされた村であつて、村の長になるために、二人兄弟と一人の妹がクロラン村の中央に降ろされた。われらは神だから神とだけ同族に持って人間界、地上の世界でわれらの役目を果たしていた。もう今は神々の風習がこのようなことだから、わが弟と一緒に一人前の男になると、結婚するだろう。われらは神だから神同士で結婚すると考えていたから、天界にわれが自分の結婚相手としてふさわしいと思う人や、わが弟と結婚させたいような人を探したけれども、本当に善い者 *p.123* われの心にかなう者は少ないようだ。

4-5 ^{かどわ} 拐かされる二人

それゆえ人間界、地上の世界をどこまでもただ術だけで見回し調べたところ、オタサムびと人間の勇者に育てられていた(?)ポンテセウ姫はそれこそ美貌とともに刺繍の腕もわが結婚相手としてびつた

りだ。その他にオタサムの若い姫もそれこそわが弟と結婚させるには(?)いささか劣るかと思つたけれども、そなたら二人をわれがかどわかし、このようにそなたら連れて逃げたそのわけは、人間というものは目さきのことしかわからないものだから、誰も知らないのだよ。ずっと遠い所から見ても美しかったのだから、*p.124* さいわいにもずっと近くで見たら、あまりにも女神たちが何倍も数倍も立派で本当にまあそなたたちはあまりにも器量がよく、あまりにも美しすぎるその姿はなんと驚くべきおそるべきものであることか。いいあんばいにまだそなたたちが男に慣れていないことがいちばん嬉しいのだ。

4-6 神との婚姻の提案

若い姫たちよ。いかがかな?人間の男をそなたたちが夫にするよりも神の夫を持つほうがまことに嬉しいはずだ。どのようにそなたたちは思うのか?そなたたちが嫌がったとしても、クロラン村の村の中にそなたたちが着いたならば、どうあがいたとしても、そなたたちの村へ帰ることはややこしくてできないのだ。決して言葉そむかず、*p.125* わが言うことを聞いてください。本当にどこまでも心臓の先に入れるほど大事に思い、おおいにそなたらをかawaiiがついていつまでも幸せにくらすつもりなのですよ』と長々とこう言いたいことをくり返しくり返し言い続け、勢い込んで掛け声もあげています。

4-7 怒りと悪態

ただ聞いただけではありましたが、怒りのあまり、狂ったように朦朧としてわたしの心はあとさきもわからなくなり、わたしがどうしたのかもわからなくなりました。わたしがぐるぐる縛られていないのであれば、今言った者の顔を何度もなぐりつけ、顔をめぐりとり(引っ掻き?)、わたしが罵倒(?)でもできたら(?)少しでもわたしのうぶぶんを晴らせるのだけれど、このようにされているのだから、ほんとうに情けない気持ちが湧いてきて、わたしはベッベッ!と吐き捨てカーッカーッとつばを吐いて眉をしかめたり、*p.126* ひくひく動かししたりしました。わたしがそうしたら、わたしの義妹もわたしと同じように思っているものだから、あのようにわたしがしたみたいに義妹もしかめ面をすると、クロラニびとは笑い声を高くあげながら、どこへやら夜も昼も船を進ませて行きます。

4-8 痛罵に思い馳せる

おおあわれ、ああかなしい。育ての兄さまの決めごとの（と約束した？）いきさつについての振る舞い（方法やりかた？）がまずかったから（？）オタサムびとがわたしを悪く思って、幾つもの痛罵数々の痛罵をわたしに浴びせ、わたしの方に振り向くことも顔を向けることさえしない。気持ちの上では気が晴れないこと（？）があったとしても、何か悪い気持ちは少しも持っていないわたしなので、わたしはただ神にのみお任せすると思っていたのに、もう今はいつも *p.127* 人々にやっかまれるような運が悪いわたしだったので、わたしの婚約者あれほど神のようなお方あれほどの貴人から（？）もう今はよい運からわたしはもう見放されて（？）いるから、ほんとうに情けない気持ちが湧いてきます。

4-9 抵抗むなしく

イヨチびと神のようなお方は姉弟ともどもあんなにもまあわたしたちはお互いに親しみ合い（？）ふたたびまた会うことになるわたしたちだと思っていたのに、まさかまあこのようにされるとは（？）思わなかったのに、どこの国のどんな村なのか、クロラン村とは今までただの一度もわたしは聞いたことがありません。その村にさらわれて行くと（？）クロラニびとが言って（？）はじめて、ああそうか、どこへ二人で行ってしまったのか、誰も *p.128* 知らないだろうと思ったら、なおさら腹が立ちます。なんとかしてわたしの縄が解かれ縄が緩んだ時に自分の命を棄て自殺しようと思っただけで、もう今は何もじっくり考え思い巡らせることも（できずに）、憤死者（？）のようにまぶたを閉じ、首から上が消えたみたいにながっくり頭を垂れておとなしくしていました。同じようにまたわたしの義妹もそんなふりをしていました（？）。

第5章 戦さの火蓋が切られる

5-1 戦さの前兆

どこに船が向かいどこに行ったところで、あの（？）船の行き先は（？）怪しい。それでわたしは薄目を開きそれを注意深く聞き耳を傾げじいっと聞き入っていました。聞けば、何の音なのでしょう。わたしの前方の陸の方からたくさんの鳴動数々の鳴動が *p.129* 起こり、国土の底へ鳴りとどろく音がしたと

ころ、クロランの奴は聞くやいなやただふつうに心配し案ずるであるならいいのに、顔いろをさっと変えて、ひとりごとを言う声がこうあるには『何の音なのか、恐ろしいなあ！わが村に戦いが勃発し戦さに突入したらしい感じがする。わが義弟どのとわが妹がぐっすり寝込んでいる間に準備されて（？）こっそりオタサム村大陸（内陸？北海道？）の村に奴らは上陸し（？）、今は毎日その様に（？）どこかに行ってしまったのか、わが弟やわが妹が知らないでいる（？）。まこと俺はこちらへ来る途中でも（？）心配していたのだが、戦さが始まってそのような物音が聞こえるのか？何ともまあ *p.130* 今日にかぎって俺がいないのを狙って（？）戦さを繰り出したその物音なのか？昔からずっと（不詳）平和に治められていた村であったのに』と本当にひとり思い案じて心配する声が聞こえてきます。

5-2 燃えるクロラニ村

心の中で（ざまあ見ろ、好い気味だ！）とわたしは思いながら行きました。やがて見れば、遠くからではあるけれども、たくさんの戸数がある村がずっと見えてきました。村のしもて端に激しい火の手が上がり、炎の丸い一塊が天空にもうもうとした霧のように烈しい吹雪のつむじ風となって立ち昇り、おびただしく吹きあげ吹きあげしています。わたしはひと目見だけで可哀想に思い（？）、心臓がどきどきし、気分が悪くなりました。村中央にぼこんと独立した山がそそり立ち、中腹まで黒いもやが *p.131* たなびいていました。その山頂から星のきらめきのように何者かがわたしたちの方へさっと降りてきたと思ったとたん、甲板に何者かがぱっと飛び降りました。わたしが見ると、まさかまあそんなものを見るとは思わなかったのに、オタサムびとわたしの婚約者が猛烈に怒っているものだから、顔いろも恐ろしげに、二つの目は二つの小さい星のごとく相ならんではまっていて、何者かを自分のからだに縛り付けています。見ると、どのような生まれのどんな育ちのお方たちなのでしょう。男の姿をした者と女の姿をした者—さほど年長ではない者たちが後光のせいでもやのせいでよく全体がわたしは見ることさえできないけれど、その手やその脚に *p.132* 縄をかけられ小石縛りに縛られていて、その真ん中をつないでわたしの婚約者が足首にゆわえつけてムクとい

う蔓草の根がコロコロ転がるさながらに転がしていました。

5-3 襲撃に憤るクロラニびと

クロラニの奴は非常に驚いたものだから、目を大きく開き、容貌があんなにも美しかったのに、その怒りを顔中にみなぎらせ、「おのれ小瀬千万、小生意気なオタサム野郎くされアイヌの血統悪人の血統めが居るにもことかいて、まったくとんでもなく霊力がわれよりありすぎる奴なのか？ほんとうに奴はぐっすり眠りこんでいるかのような格好をしていた。その間に女たちを俺はさらって来たのだったが(?)意外にも、奴は狸寝入りしていて、それからひそかに俺の後を追ってきて何もかも聞いてから、われらが静かに守ってきたクロラン村 *p.133* であったのに、攻撃するにもまったくとんでもなくするさまがこのようなことなのか？さらに何事にも情がうつるのがこのとおり人間であるのに、何か汝がおれにわざとわが弟とわが妹であったから(?) あえておそれはばからずわれは神だから奴のかかとに結びつけるさまがこのようなことなのか？たとえどのように お前が振る舞ったにせよ、少しでも生かし少しでも助けてはおかない、殺してしまうぞ』と言って、彼の手元がピカッと光り、激しい太刀がたいまつのようにわたしの婚約者に跳ばされ曲線を描いて跳んで来た(?)とわたしが思ったら、奴の太刀を握る手や前腕や手首をわたしの婚約者は強くつかみぎっちり握って、この怒号、憤怒 *p.134* の大声が響きわたりました。

5-4 神々への口上

『何をぬかすか！何度でも言え！幾度でも言え！聞いてやろうぞ。クロラニびと腐れたつまらん奴愚かな卑しい奴そんな奴が生意気にも神と自称して神の風習神の掟立派な決まりごとがこのようなことなのか？神でも何でもなりゆき次第で若者の考えこどもの気持ちというものはそういうものだから、人間に見とれて惚れたのなら、盗み出す考えではなく話すこともできなかったのか？どんな理由にもとづいて、昔からずっと神うちにまで幾世代も前の大昔から祖先の素性が知られている *p.135* オタサム村であったのに、真夜中の神々も人間もすっかり熟睡しているちょうどその頃合いに家の奥深くにお前が忍び入って生きている人たちをかどわかし、さらって

行った—こんなやり方はまことの神々の習慣ではこのようなことをできるものではないのに(?)、(不詳) その上とんでもない悪口をわれに言うことがこのようなことなのか？いささかでも詫びをお前が入れるならば、お前らを助けてやろうと思ったが、どこまでもこのような見でそう言うのであったなら、どうすることも何とも言いようもない。お前の弟と妹も何かお前がおれに意図的にしたこと(?)でなくてもわが佩く太刀の刃先の上に身を投げさせるぞ。それを戦さの戦力として戦いのちからにして、かかってくるがいい。もしやくされアイヌの血統 *p.136* 悪人血統のオタサムびとにお前が完敗したとなったならば、お前に生きてきた間生き恥を汝に我が与えてやろうぞ』と言ったかとわたしが思ったとたん、その何者かは皆いっせいにちぎれた断片を左右へぱっと散らし、まさに汁の実をまき散らしたみたいに飛び散りました。

5-5 鑄^{つばせ}迫り合い

それと同時にくやしがる神の魂の出立つする音がゴロゴロと鳴りひびく音がしたら、クロラニびとはそれこそまことにびっくりし激怒したのだから、目の色をらんらんと光らせ、自分の鼻をつかみ口をおさえて驚く仕草をしながら、『本当にまあオタサムの野郎め。ただありきたりの人間だと考えていたから、おれはなめてかかってああしたのだが、忌々しい！わが義弟どのはたぐいまれなる勇者であり、わが妹も類いまれな巫女滅多にいない巫女 *p.137* であったのに、まさか(?)一刀のもとに斬り殺されてしまったのではあるまいな?!』と言って、「どのようにも好き勝手に振舞うお前だとて」と怒号する声が砕けつぶれるように響いてきて、お互いに太刀の光を月の暈のように頭上にとりまかせて太刀を振り合わせ、かわるがわる激しく振った刀の下にすばやく身をかがめ、風のように入れ替わり、ただ刀が触れ合う音だけがおびただしくカチンカチンチャリンチャリンと響いています。それと同時に本島人の憑き物と見知らぬ人の憑き物が天空上に音を爆発させ、互いの音がからみ合い、尾のあるような多くの竜巻幾つもの旋風がこの小舟にも吹きつけ吹き上げ(?)、揺すられ、今にも海の底 *p.138* にひっくり返されそうになり、わたしはすっかり心細くなりました。勇者たちの雄叫びの声フムッという気合いの音が飛び交い、ある時は天空上に飛び上がり、時には船内に

落ちてきて刀で斬り合いました。しかし、まったくもって少しも切っ先を触れ合わせも討ち合わせることもしないみたいなそれこそ優劣つけがたい勇士が対決して戦っているものだから、斬り合い無しの傷つけ合うこともないこの争いが国土の底へ鳴りとどろく音がしました。

5-6 神への祈り

おおあわれ、ああなさない。わたしの行いのせいで、とうとう戦いの元となったことまったくとんでもないことになったから、何をどう本当^{まこと}にわたしがしたらいいのかしら。このように縛られ結^{むす}かれていないならば、*p.139* たとえどのようにわたしがされていてもわたしの婚約者をわたしが助けに駆けつけるのだけれど、ほんとうに根元においてわたしの婚約者が正しかったのだから、神のお陰で（神の意志によって）命をとりとめ生き返るのだろうかと思ったら、動くことも振り向くこともわたしはできなかったけれど、心の中でわたしの婚約者の魂の背後に憑く守り神の上で呪文と唱えながら踊り、それとともに※神々が振り返ってくださるようにとわたしは念じました。

5-7 解放される二人

そのとたん上空上で何者かの魂の出立する音がゴロゴロと鳴りひびいたとわたしが思ったら、船内でわたしの婚約者が血糊の刀で顔の脇をピカピカ光らせてチッと舌打ちしながら、刀の血を何度もぬぐってから、わたしたち二人がグルグル巻きにされている綱の隙間に *p.140* 刀を通しました。金輪が切れる音がチャリンパキンと鳴りわたり、わたしたちの手の先から脚の甲まで棒棹みたいにこわばっていたのを柔らかに揺り動かして今ようやくわたしたちはフーッとため息をつき、船の艫の方へ重なり合って向かって行きました。とても恥じ入っているわたしたちだから、わたしの婚約者神のようなお方に恐縮してわたしたちは忍び泣いていました。わたしの婚約者は疲れきっているものだから、着ている着物が胴によれよれにねじれてまくれあがり、白い肌の光が昼の陽光のようにあたりに輝いていました。

第Ⅲ部 舟上の出来事

第6章 舟上の神変

6-1 帰路へ向かう小舟

ともがい（櫂の一種）で海中をかき返しかき回すたびに体をぐっと後ろに反らして、今までの船足など比べものになりません。この小舟はまるで矢が飛んで行く槍が飛んで行くさながらに波の上を一直線に滑って行き、舳先にあたる波をザアザア蹴立ててサーッとすべって行く音でわたしの耳元に風がうずまき起こる。*p.141* 昼となく夜となく船は進み、今はもう沖の同人の海と内の国びとの海と接する所だと思われる所に来たところ、何の音なのでしょうか。

6-2 豪奢^{ごうしゃ}な若者^{けんげん}の顕現

突然急に空のはてにバタバタバーンと爆発音がし、神々が降りてくる音がゴロゴロと鳴りひびきました。たいしたことがない勇者たちであるならいいのに、真の勇者たちにちががなく、多くの竜巻たくさんの巻き風が前にむらがり、わたし以外の所に降りるのならいいのに、船の真ん中に（？）降りて来たものだから、吹きつける神風がわたしたちが乗っている小舟の上に一直線に滑って行くかのように広がっておおいかぶさる音がしたところ、わたしの婚約者は聞くやいなや、*p.142* まことに怪しいと思っただけでなく船の帆を降ろして停泊し、その間にその何者かたちは船内にドスドスと落ちて来ました。霞の丸い小山が二つ並んでいます。二つの小山の濃いもやの真ん中に向かってわたしはもやを散らしました。まあ驚いた！年若いお方なののでしょうか。一歳ほどわたしの婚約者より年下くらいのように見える者たち—豪華な衣装の襟や裾まわりにはばひろの平金をぐるりと下げている者たちが金糸銀糸の豪華な衣装を襲ね着し、かなぐさりのベルトを胴に締め、神からさずかった太刀で脇の下がきらびやかです。金色の兜のその垂れひもでご自分の顔をきりりと締め、兜の縁からは神々しいお顔が明るく輝いています。勇者にちががなく勇者らしいおもさしで顔つきがきわだっています。

6-3 若い女性の立ち

まさかまたそんなものを見ようとは思わなかったのに、*p.143* クロラニびとと日つきや眉つきがそっくりです。あとへすぐびったり付き従う者をわたしが見ると、若い女性なのでしょう。一歳ほどわたしの義妹より年下くらいのように見える者たちで、大切に育てられ美しく育てられた者にちががなく、金糸銀糸の豪華な衣装その衣の中から足を運び(?), 耳や胸元には耳輪や首飾りをぞっくりとつけ、絹の帯を胴に締めています。片方の肩の上に日光の虹、もう片方の肩の上には半輪の虹が射して、頭上の所で交叉していました。美しい髪の毛は絹糸のようにその頭上に広がりおおいかにふさっており、その髪の毛のさきには光がつきまもっていて、髪の毛の下には神々しいお顔が昼の陽光のようにあたりに輝いており、どうともこうともこれ以上ほめる言葉も見つからないほどの美しさです。

6-4 告げられる伝言

p.144 族にちががなく目もとや眉つきがよく似ている二人であって、ふつうに憤み深いだけのものならいいのに、顔色がさっと青ざめました。わたしたち三人のからだを眺めてから、それこそ本当にほんとに気の毒に思っているものだから、わたしたちの顔は直視せずに頭をさげていらっしやいました。男の方は伝言を持って来た者であるらしく、疲労の色が顔色に目立っています。少し経つと、年若い青年の声を美しくひびかせるその声がこうあるには、「これこれ、オタサムびと神の勇者よ。

6-5 クロラニ村での顛末^{てんまつ}

妹ごたちともどもわれの言うことをよく聞いてください。わたしたちはクロラニにいる村おきの *p.145* 弟と妹でありまして、たった今わたしたち二人してそなたを殺して、天でわれらの両親のそばへ送って再び生き返らされたのです。われらが行ったときに天では神々の話し合いの激しいのが一緒に始まっています。そのわけはクロラニ村の村引き(?)をそなたがしたときに、はじめて神々が振り向き、神々のお蔭で(?) (?)そなたは命を取り戻したのです。その間にまた育ての兄上もそなたを殺して天にのぼって行ったのです。天において神々たちは急に振り向けないものなので、人間界、地上の世界では

何かむずかしい困難な出来事があったとしても、すぐには解るものではありません。』

6-6 凶行の原因

それゆえ育ての兄上が天にのぼり、*p.146* そこですぐ戦いの原因戦さの元を探したのですが、意外にも、人間の村本島人の国土であるイヨチ村の川の水源地に化け狐の魔物がいて、何が何でも嫁が欲しいものだから、天界でもニッネ カムイが住む世界でも自分の結婚相手にふさわしい者を探しても、気に入ったものは一人もいませんでした。それゆえ人間界、地上の世界を眺めたところ、ポンテセウ姫がそれこそ美貌とともに刺繍の腕もすっかり気に入り自分の妻にふさわしいと惚れ込んだのです。どうにかして殺して神霊を奪って連れ添いたくても、見ている神々は地上の世界では増えてたくさんいるものだから、*p.147* まったくもって思うようには殺せない。さんざん考えたあげく、ポンテセウ彦たぐいまれなる勇者をずっと前からさんざん騙しにだましたあげく、人を殺して食べる凶悪な神のせいでポンテセウ彦は祖先からの言い伝えを間違えないように伝えました。人を殺して食べる凶悪な神の意図がこのようなのであったなら、(?) (?)イヨチびと神の勇者の背後に憑く守り神の上は神の領分であるはずなのだから、夢の中でこのようにかくかくしかじかであることをすべて見聞きして知り、ポンテセウ姫の命を取り戻してから、神の言うことをよく聞いてそのとおりにしておとなしくしていらした。全く極悪な神が再び大勢の神々たちの眼の隙間をかいぐぐって(盗んで)ポンテセウ彦が *p.148* イヨチ村に戦さを仕掛けるようであるならば、人間の族長たちが憎しみ合うけんかが激しかったならば、その間にお前がそうして若い姫を殺せるとらちもない(つまらない)考えをした。それで戦さが襲来した時に強い憑き神を持つそなただから、いいあんばいに戦さを仕掛けた(繰り出した)奴らとそなたが出会って、穏やかな物言いでこのようなお互いにたくさんのよきことをいくつものよかるべきようにそなたらが合意して、仲よくしているその様子があつた(例の)狐は気がかりなものだから、ますますけしからん想いがつって来て、またさらに新しく思いついて、ずうっと本当に遠いはるか遠い沖の国(外国)の末端にあるクロラニ村でありましたが、(?)育ての兄上は神でありますから、*p.149* 何の悪い精神も何の悪い行

いも少しも持たずにしっかり村を守っており、心配事も無く共に揃って内治外交などをしながら居たところ、まことに悪い腹黒い神が神々たちの日さきにかすみを掛けて、育ての兄上をずっと前からだましていたのでありました。それで育ての兄上はあのようには振る舞ったのでありました。

6-7 黄泉へと送られる悪神

このような本当に遠いところに淑女たちをわれらが連れて逃げたのであったなら、ただありきたりの人間たちなものだから、少しもそれがわからない。それゆえいつかポンテセウ姫をうまくして殺せるとも考えたのですが、また陰で守る神の力が強い自分の憑き神の言葉がわかるそなただから、育ての兄上の跡をこっそり付けてきて、このように *p.150* 育ての兄上がおっしゃったことをそなたが聞いて、まこと自分の心で考えたことだとそなたは思い込みました。それゆえ戦さの狂気戦いの狂暴な怒りにそなたは取り憑かれて、クロラン村にどなり込み攻撃をそなたが仕掛けました。それからこのような事情がとうとう天にいる本当にえらい神々も弱い神々たちもすっかりわかって本当に驚き、全く極悪な神を大いに懲らしめて死罪を与えて、二度と生き返らないよみの国（冥土）に追いやりました。

6-8 村での暮らしの奨め

それからクロラン村でそなたが殺した神々はすべてとうに殺されて遠くまで行ってしまった靈魂も後に殺されてまだ近くにいる靈魂もわれらは追いかけて行って降りてきて、最初の様になつかしがつて喜び合っていました。育ての兄上も本当にほんとに驚きました。*p.151* 何か悪い神がした怒りをも本当にそれぞれ恥ずかしいだのいろいろオタサムの人と呼ばれたことだのにしても、男も娘たちもまこと神以上に美しいようすでいらっしゃるお方が馬鹿にされたことを本当にわたしはお気の毒に思うものの、何をどう本当にわたしがつぐなって謝ったらいいものか？神にもまさる鎮座なさるご様子であるお方が宝物にもまさるわが弟とわが可愛い妹のお二人ともども、わが悪行の一連のいきさつ—おん身たちをもわれが殺して天の神々の所まで行ったことは本当にお気の毒でした。「天界にいる以上に人間の村本鳥人の村オタサム村は夜ではあるけれども、われらが気に入りにくつろいで過ごせ *p.152* そうに思われますぞ。

お二人ともども、オタサムびと神のようなお方よ。そなたに対して償を出しますから、降りてきてわれらの前であやまってください。神のようなお方が同意なさるなら、これからはもう人間の族長たちともども一族になりなさい。クロラン村に住んでいるよりも（？）まことによいことだと思えますよ」とおっしゃいました。

6-9 受け入れる二人

「われらの両親たちも他の神たちも皆いっせいにしっかり同意したからわたしは下りて来たのです。育ての兄上は天界から妻をめぐってクロラン村へまた降りてくるつもりでした。育ての兄上は（？）全く極悪な神に（？）それから騙されて（？）このような？*p.153* 本当にわたしたちもまことお気の毒に思っているのです。育ての兄上のおん前でせいっぱいわれらはあやまりますから、さあさあ！神のようなお方を生き返らせてわれらを許して（？）くださいませ。われらは神であったにせよこれからはもう内仕事をする召使いにでも外仕事をする召使いにでもわれらを召し使ってくださいしても、少しも嫌だとは思わないのです。」と何とまあかしくくて雄弁に話すのかしら？口の中からするすると本当に何かが流れ出たみたいに長々としゃべるわしゃべるわして言い終えました。

6-10 家族となった面々

わたしの婚約者は一緒に掌を上へ向け *p.154* ゆったりと上下させて、何十回もの拝礼を重ねながら、ややしばらくじっと注意深く聞き入ってそのようにして居て、それこそことばが言い終わるか終わらないうちに、フムッフムツという氣勢の声を挙げました。あんなにもまあその剛勇ぶりであったお方が年若いお方をしっかり押さえてその肩をつかみ、「何をぬかすか！何ともまあ（？）（？）まったくとんでもなく重要な言づてを言っているものだな？同族もいないわれだから（？）劣っている者でもわれはうれしくわたしは懐かしいものだろうものに、何ともまあ神のごときお方たちは神でありますから、思いやりのある気持ちが良過ぎるその話はびっくりするものですな？本当にまあ意外にも、*p.155* このような重大事大きな出来事に出会ってしまわれると（？）ただ普通の人間日さきのことしかわからないわれですから、今の今までほんの少しもわれは知らずに（わか

らずに) いたのです。おおあわれ、あんなさけない。クロラニウクルは意外にも、自分の意志であのようなことをしたのではなかったのであった事を、かわるがわるざっと互いに言い合って喧嘩する様子があったのに、親類になるにしても容易ではない本当にまことの神でありますから、立派な行いをなさる様子には驚かされます。われ自身はそれこそまことに神に守られている者であることを感謝しています。今はもう意外にも、みんなから嫉まれ憎まれているわれらですから、何の出来事も今までわれは知りません。ただ(?)ばかり p.156 悩んでいたところだったのに、神々のお陰で何ごとでもその原因がはっきりわかりました。ほんとうにわれは喜んでこれからはもうわれらは兄弟姉妹になり、お互いに愛し合い、世話をしてお互い大切にしたい、いつまでも会えばお互いに喜び合ってわが役目を果たして神々を喜ばせるつもりですよ」とわたしの婚約者は言って、神である若い青年を抱きしめ、このたぐいまれなる勇者はたくさんの熱い涙数々の熱い涙をはらはらひとり流しています。

6-11 喜び合う一同

そうするから、神のような方々はあんなにもまあ大儀そうに手伝っていた様子の方々が、ただふつうに喜ぶものであるならいいのに、本当にも頭の上がぼっとはじけ散ったみたいに、唇の上に笑みを浮かべて p.157 妹と共に「お兄さまあ！」と言いました。わたしの婚約者はまるでますます力を失った者のように首をむちゃむちゃふって(?)にこにこ顔をむけて、何度も何度もなでさすりました。神のような方々たちもわたしの婚約者のひざがしらや手の甲を何度もなでさすって、皆で挨拶の礼を交わし合い魔払いの気合いの声を発し合いました。神のような方々はお二人でわたしたちのそばにやって来て挨拶し、しっかりわたしたちに謝罪しました。ニツネ カムイが欲したことであったと思ったから、ほんとうに心から心の底から神のような方々をお気の毒に思い、それこそ本当に力なくくたりとくずおれて、泣きながら挨拶し合い、かわるがわる魔払いの声を発し合って挨拶を済ませました。

第7章 狐神の仕業

7-1 再びの出航

それからまた再び p.158 帆をかかえて走って帰ってくる音でわたしたちの耳元に風がうずまき起こっています。あんなにもまあ「永い間」自分の気持ちを悩ませ、その上わたしの婚約者がわたしを悪く思っていることを、ただ言葉だけであったにしても、わたしはそれだけでも死んでしまいそうに思って、わたしは堪え忍び我慢に我慢を重ねていたところ、本当に神のよきお計らいによって、かくかくしかじかであったことのすべてのわけをすっかり全部わたしの婚約者が理解したことをそれこそ心中ほんとうにわたしはほっとしました。

7-2 解ける誤解

わたしの婚約者もわたしの義妹もたった今はじめてこのように聞かされた時(?)ほんとにほんとに心から心底驚いたことがわたしはすっかり解り、ほんとうにわたしを可哀想に思っていることもわたしの婚約者がただふつうにお詫びしてあやまるのであるなら p.159 いいのに、振り返ってわずかにわたしたちの方眺め、それから再び自分の後ろへ振り向くと、涙を流さず泣いているように思われました。誰も見たものがいなかったのならよかったけれど、わたしだけがほんの少し見ただけだから、なおいっそうわたしは安心しました。

7-3 悪しき狐神への思い

おおなんと、ああ情けない。育ての兄さまをなんてまあほんの短い間にしても(?)わたしがののしり憎んだり恨んだりしてうつぶんを晴らした(?)ことかわからない(?)。いつどんな時でもわたしたちが逢った時はこうこうしかじかと罵ったり(誹謗したり?)悲しませること(不埒なこと?)をするといつも心の中で考え、フムツという気合いの声をしながらわたしはいきどおりを感じていました。たった今の今までそうしていたのは(?)、あくまでも(?)あの悪狐ひどい化け物狐がしたしわざであった(?)ということだからほんとうに育ての兄さまをすぐさま p.160 わたしはお可哀想に思いました。どんなにかまあ今になって後悔して、このたぐいまれなる勇者はきまりが悪い思いをしたことでしょうか。おまけにまたこのような人殺しの凶悪なニツネカムイのせいであった事を聞いたのであるから、ど

んなにかこう大驚きしたことでしょうか。あんなにもまあ私の育児に苦勞をしたのであったのに、とんでもない人殺しの神の決めごとのせいでお気の毒になあ！心の中だけであったにしても、育ての兄さま神のようなお方をわたしがののしったことを本当にわたしがあやまったら、ああいまいましい！あのくされ狐墓土みたいに腐った奴が、たいした顔たいした容姿でもない並の男には負けないわたしに対してまあ（？）惚れるということをおわたしにし、ざま悪くされた（？）にも（？）*p.161* ことかいて（？）わたしに対して（？）あくまでも（？）ひどいことをした。神でも人でも気をもませ、敷物のように足の裏でギュウギュウ踏みつけられても少しもわたしがいいきみだと思うわけでもない（？）。何か言う者がこの人間と思ったのに（？）、あれほどひどく怒るなんてまあ。その上いい気味だわ、恐ろしいよみの国ひどいあの世に追いやられたということだから、ほんの少しわたしのうつぶんが晴れました。『ニッネカムイも人間界に住んでいるものならば、立派な風習を持っているのであれば、せめてニッネカムイのイナウや乾いた酒粕なりともわたしたちと一緒にまき散らして供養するのであるならば少しは（少なくとも？）自分の誇りにできるようなのになあ』と思ったら、ほんとうに情けない。

第8章 ようやくの帰着

8-1 住まいへの帰着と休養

神域にわれらは到着し、神のような方々は外からほんとうに *p.162* 慎み深く人間の住居があまりにも美しく飾られていることに本当に感嘆したらしく、首から上が消えたみたいにながっくり頭を垂れていらっやいます。それからわたしは妒の火を燃やしました。力の弱いわたしがわたしの義妹を手伝って心をこめて炊きあげて、山盛りの高盛飯を一同は持ちあげました。わたしたちは空腹で皆揃ってお腹が空いていたものだから、さんざん食べに食べ続けました。わたしたちは毎日休養し、わたしの婚約者は一家の主人と歓談し神と談笑したいものだから、右座の方の炉端に座って、その下座の入口側にわたしの義妹が座りました。神の若者が横座に座り、左座に神の若い淑女が座り、その下座にわたしが座りました。男性たちは毎日様々な事柄を話し合い、若い女性は *p.163* なんとまあ心根が立派な明るく楽しくなることをなされたことか。

8-2 暮らしの中で

しばらくたつと本当にわたしたち二人ともお互いに好きになり彼女はわたしを慕ってくれて、いつもニコニコ笑みを浮かべていました。わたしたちも心底心から若い女性を心やさしくお互いに好きになり彼女を可愛がりました。何かわたしがすると彼女はわたしのそばに来てわたしを手伝います。もう今はお互いにすっかり慣れ親しみ合い（？）ほんとうの姉妹のように思っていました。同じようにまたわたしの婚約者も神の若者を本当に可愛がり、お互いに本当に親密なことがよくわかりました。ほんとうにすっかりわたしは安心しました。

8-3 宴の準備

とある日のことわたしの婚約者がこう言いました。「これこれ、わが妹たちよ。 *p.164* 蓄えの余りでもあるならば倉から出して酒を醸してくれたまえ。せめて今この時でも本式の酒をわれらが醸してわが親戚身内たち、遠くに住んでいる者も近くに住んでいる者も呼び集め、ただ今せめてこの時だけでも落ち着いた会見よい会見をし、多くの神に感謝し、神うちにまで天の神うちまでカムイノミをしようぞ」とおっしゃったから、なんとまあわたしは喜んだことでしょうか。わたしの義妹と顔を見合わせ、にっこり笑って兄上が言い終わらないうちに、立ち上がり、肩と肩とを押し合って外へ出て行き、倉の戸をパッと開き、六重の縄がかかっている大かますを倉から出しました。わたしの義妹は外のやぐらその檣の上に立ち、村のかみ端から *p.165* 村のしもはずれへうち向かい、近くには低く呼んだり遠くには高く呼んだり大小様々の叫び声を交互に続けました。このようにそこで叫んで（？）人間だからといって一家の主だからといってこんなにも早く言うことを聞くものでしょうか。男性たち数人女性たち数人が屋内に入って来ました。それから水汲む者は水を汲み、薪をつくる者は薪を切り、臼で精白する者は臼をつき、煮炊きする者は炊飯しました。村人たちの前に立ってわたしは手伝い、しばらくすると六つの行器が横座へ据えられました。二口ほどたつと、神が食べたいもの飲みたいものですから、うま酒のおいしそうな香りの気が家の中いっぱい満ちあふれました。ふたたび、選びぬかれた一家の主人やよりぬきの婦人たちが集まり出てきて、イナウ（木幣）にする木を伐る者はその木を伐り、酒をこす者は一緒に箆を

揺り動かしています。東窓といろりの間の上座ではイナウをかき削る者は木幣を削りました。

8-4 オタサムびとの手捌き^{てさば}

p.166 わたしの婚約者も起ち上がって仲間に入り木幣を削りました。(その削られた?)イナウはまあ驚いた!たくさんの神雲となり数々の神雲となつてち昇り、その上へ帯に白いもやがたなびきました。一座のひとつとは自分の鼻をつかみ口をおさえて驚きながら、異口同音に「本当にまあ!同じように手が付いているわれらなのに、われらが仕える神われらが仕える族長の何という働きぶり、イナウ削りの何と見事なことであるか」というようなたまげた声をあげ合います。わたしの婚約者の笑い声がひとときわ高く響き渡り、幣をかき削るシュッシュツという音と酒をこすザッザツという音が入り交じって聞こえるその音がおびただしくざわめきわたっていて、まったく面白く心楽しく感じました。古いイナウは端の方へ寄せられ、まっさらのイナウが p.167 家の中に美しく飾られました。今こそ本当に家の中いっぱい白いもやがみちあふれ、酒宴の準備をし終えました。

8-5 カムイノミの口上

神の若者と神の若い淑女は今こそはじめてアイヌのしきたりを見たものだから、それこそただ普通に感嘆されたものであるならいいのに、本当に感嘆されたご様子でいてご覧になっていらっしゃる。わたしの婚約者は酒宴の正装に身を固め、わたしたちも酒宴の正装をぞっくり重ね着して器量をますますあげ、二人揃って神のようになっていました。わたしの婚約者は右座のわきに座りました。大勢のひとつたち一男性も女性も酒宴の正装をぞっくり重ね着して家いっぱいに入ってきました。右座にいるわたしの婚約者の下座にわたしの義妹と一緒に p.168 二人でわたしは座りました。わたしの婚約者はまことの村長を遣わす口上は、「ポンテセウのわが義兄上よ。たった今先祖の家にていささかの御神酒を醸しました。近しく出向いて来て最初の杯を手に取りカムイノミをしてください。」と。さらにまたまことの村長を遣わすその口上がこうあるには「いざ申し上げます。イヨチびと、神の勇者よ。たった今いささかの御神酒を醸して今宵われらはカムイノミをいたしますぞ。貴君の姉(妻?)と共に近しくご来訪して

ください。酌みたての御神酒の最初の杯でわれらは貴君に敬意を表したい。(?)」

8-6 迎えられる神々

「カムイノミや先祖供養を終え、ひと息ついてから今度こそたのしい酒宴おいしい食事をし、 p.169 食べながら悪きことも良きこともお互いに毎日よもやま話をして楽しみ合うのを期待しておりますぞ」というような結構な伝言平和な便りをことづけられた者たちは聞き終わらないうちに、すぐに返事の咳払いをして外に出て行き、はるか遠い天空上に飛んで行く音がゴロゴロと鳴りひびく。おおあわれ、ああかなしい。あんなにもまあ会いたいと思っていた方々、育ての兄さまやイヨチびと一神のようなお方は義兄弟姉妹同士であったのに、今ようやくいい会見がもうすぐ出来そうだとおっしゃるから、心の中では泣き死にしていまいそうなほど心底わたしは嬉しく思いました。ややしばらくすると、伝言を持って来た者たちがやって来る音ゴロゴロと鳴りわたり、外庭の上に落下して来て屋内に入って来ました。笑いさざめき p.170 合いながら、「神の勇者たちは何十回もの拝礼を重ねてほんとうに喜び、《もう一刻も早くご招待に預かりましょう》とおっしゃったのであります。」と申し述べました。それと同時にどこかでバンと破裂したような音がして天空上で神のやって来る音ゴロゴロと鳴りひびき、穏やかな神風を自分の前方に群がらせて、外のやぐらその檣の上に落下しました。いつものとおり勇者たちの刀鐔の触れ合って鳴る澄んだ高音をカチンカチンカタカタと響き、女性の方々は胸の玉飾りをチャリンチャリン鳴らして、玄閑納屋に向かいました。

第IV部 酒宴と平穏な生活

第9章 メナシサムの厚司メナシサムの帽子

9-1 豪華な厚司、綺羅びやかな帽子

戸口に立って揃って訪問の礼であるエヘン、フムなどという咳払いが聞こえ、その声に金風がついて鈴の音のような爽やかな声となって母屋入り口のすだれを風のようにそよがせ、内土間につぎつぎにサツと入って来た人々を p.171 畏れかしこみつわたしは見ました。なんとまあ素晴らしい。育ての兄さまはいつでも姿が美しく顔も美しかったけれど今の美しさはさすがみがあるほどで、晴れの席の装束を着

て器量をますますあげ神のようです。けれどもただふつうにかしこまっているのであるならいいのに、かすかに顔色が青くなりました。その後ろから人ってきたお方はなんとまああらまあ、イヨチびと神の勇者がいつものとおり神のようなお姿で、メナシサムの厚司豪華な厚司を着なし、着物の表には神々しい光が照り輝いています。メナシサムの帽子きらびやかな帽子をかぶり、髪の毛の下には神々しいお顔が明るく輝いています。

9-2 体調を憂う私

何の病気が病いにかかったものか、わずかに少し痩せていて顔いろもややしぼんでいるその様子を *p.172* 立ち寄って (?) ちょっと見ただけであったけれど、ああかわいそうに、おおかなしい。本当にわたしが至らなかった一連のなりゆきでお気の毒にまあ！神の勇者が若者の気持ち年端のいかない者の考えることなものであるから、つまらない取り柄のないわたしを慕ってくださったようにわたしが思ってしまったものだから、わたしのことを思っているうちにこうなったという事情がはっきりわかったから本当にわたしの気持ちはうれし泣きして死んでしまいそうでした。今はもうどうしたらいいものかと思えば、たぐいまれなる勇者がほんとうに心から心底可哀想になり、息の孔もふさがれたみたいに思いながら、座敷の上にひとまたぎで (?) あがって (?) 左座のかみて側に揃って立ちました。

9-3 慎み深きイヨチ姫

p.173 横座で神の若者のからだを眼ざとく見て取り、左座にいる神の乙女のからだを見て取ったものの、皆いっせいに驚き、まことに変だ (怪しい、おかしい) と思ったらしく様子でした。一番最後に母屋入り口の敷居を超えて人ってきた者をわたしが見たところ、イヨチ姫 いつものとおり神のようなご様子でただ美しいと言うだけでは表現できないほどの美しさで、酒宴の正装をぞっくり重ね着してますます神のようなご様子です。ただふつうに家の中を褒めたたえ慎み深くかしこまるだけならいいのに、からだをもじもじさせながら顔をあげることさえできないで、金時絵の行器を後ろ手に持って内十間に膝まずき這うように進みながらもう少しで『お姉さまあ』とわたしは言っても今にも肩を抱きしめようと *p.174* 思ったけれども、男性が会見の辞を

述べようとする前にそんなことをするわけにはまいりません。それでわたしの思いをぐっと我慢していました。

9-4 流暢な弁論

わたしの婚約者が立ち上がって、上座に行き、なげしに置いてあるものをぱっと降ろしました。その柄が短い槍を杖について寄りかかり、槍の柄へあごを載せ、上座に立って、した弁論は郭公鳥の声のように高くはっきりと響きわたり、なんとまあよい声ですばらしい調子で話されたことでしょうか。その言葉は (?) 金の風のように美しく響きわたって、いつものとおり雄弁であってなんとまあ才智ゆたかに物覚えよく申し述べたことでしょうか。かくかくしかじかと極悪の神から嫉まれ憎まれて、こうこうしかじかと皆が行動したことを※*p.175* ひとつ残らず並べ立て、口の中からするすると高くはっきりと響かせて言い終えました。

9-5 感謝し合う一同

その次にイヨチびと神の勇者がこのようなまことの村長族長であるから、わが可愛い妹を殺すにもことかいて (同じ死ぬにしても) 当たり前でない (異常な) 死に方にされてしまわれ、その命を取り戻してさしあげると、霊力のない日さきの短い我だからこんなこともわからないわれであるが、なるほどなあ！わが可愛い妹のふるまう様子が怪しい (おかしい、腑に落ちない)。われはそれが面白くなくて (不機嫌になって) 若者の考えは浅はかなものだから、役にも立たない別なことを見てとって (見当違いして?) わからなく (判断に迷い?) なり、幾つもの痛罵数々の痛い言葉をわれは浴びせた。その後にもまたわれは可哀想になって、*p.176* その考えわれが心に思うことは良からぬことで (?) あったのに、このような事情が神々のお陰で解ったときに、ポンテセウ彦わが義兄やイヨチびと神の勇者の義兄弟姉妹同士やわが可愛い妹だの一同皆に我はあやまり、まことに恥じ入り心からお詫び申し上げます』と言ったところ、育ての兄さまもイヨチびともイヨチ姫も一同皆は今こそはじめて神々の故事や人間に関すること、人を殺す極悪神の噂を聞いたことには、それこそ皆が驚きあきれ合ったものだから、一緒にフムツと氣勢の声を上げながら、かわるがわる感謝し合い、魔払いの声を発しながら行進しました。

9-6 私の無事を祝う育ての兄

p.177 神の若者や御妹ごともわたしたちは拝礼し合い、魔払いの舞踏行進をし、感謝し合い、喜び合い、皆で撫でさすり合う挨拶を交わしました。一族の長たちや勇者たちはそれこそ太刀で斬る動作を真似し合い、槍で突く真似をし合いました。今ようやくわたしは膝まづき這うように進んで、育ての兄さまのそばに行ったところ、「かわいい妹よ」と「心臓よ」と兄さまは言ってわたしを抱きしめました。『お兄さまあ!』とわたしは言って兄上の膝にまとわりつきました。たぐいまれなる勇者はただふつうに可哀想に思うものであるならいいのに、わたしのからだの上にたくさんの熱い涙数々の熱い涙をはらはら落としながらわたしの無事を祝いました。

9-7 育ての兄の詳述

家いっばいに詰めていた人々、p.178 男性陣も女性たちもたった今はじめて人間に関する話を聞いた者は本当に驚きあきれ、またあらためてわたしの無事を祝し、大勢のひとたちがわたしに同情しました。イヨチ姫はそれこそ泣きながら「可愛い妹よ」と言いながらわたしの肩を抱きしめました。わたしも「お姉さまあ」と言って、お互いにひしと抱き合い撫でさすり合う挨拶を交わしながら、精一杯感謝し、あらためてまたわたしの無事を祝しました。育ての兄さまは何十回もの拝礼を重ねてわたしたちの前で大勢のイヨチびとの義兄弟姉妹たちに感謝し、いろいろとまわりに筋道を立てて詳しく述べました。

第10章 酒宴の始まり

10-1 盛大な酒宴

それからずっと酒宴の座が並びました。うたげの席のかみの端も p.179 うたげの席のしもの端もほんやりかすんで見えるほどです。

10-2 主賓の案内

育ての兄さまは右座の炉端に座らせられました。イヨチびと神のようなお方は礼儀正しく丁寧に手を執られ行器の後ろの席に主賓として案内されました。その隣の席にクロラニウングル神の若者が座らせられました。育ての兄さまが年長者故かくかくしかじかとまず最初にわれらが祭る神々の祭りかたを充分

知っている者だから、わたしの婚約者に教えました。わたしの婚約者はイヨチびとと向かい合って座り、それからカムイノミが始まりました。

10-3 酌と先祖供養

天の神々の所までわたしたちは御神酒を捧げて祈祷しエナウ（木幣）を捧げました。宴席のあいだをわたしはあちこちまわって手に持つ片口の銚子を自分の胸の脇にささげ持って酌をして歩きました。遠くにいる神々近くにいる神々それぞれにもわたしは盃を贈り木幣を捧げ終わりました。それが済むと一番奥にいる先祖のお爺さまやお祖母さま、p.180 最近亡くなって新しく先祖の列に連なった祖父や祖母など先祖たちすべてへの先祖供養を終え、一同ほっとしました。

10-4 楽しい酒宴

それから楽しい酒宴が始まりました。宴席上では一家の主人たち族長たちはほんとうに喜んで酔えば歌う酒歌に手拍子を打ち、女性側はたくさんの人々が舞う声々踊る声々元気よくにぎやかで騒がしい。まったく面白く心楽しくわたしは感じました。今度こそ初めて真のアイヌのしきたり酒宴の仕方をわたしは見ました。

10-5 酒宴に感心する神々

クロラニウングル神の若者は妹とともに、一座の人々も本当に今初めてアイヌのやり方本式の唄や踊りを見て、本当に面白がり感心しているものだから、いつも唇の上にはほほ笑みを浮かべて大勢の上を眺めていました。神ですからお二人だけ p.181 違う鳥のように異彩を放って人々の仲間入りをしました。時にはわたしも歌舞のところで皆の仲間に入り、踊りの先頭歌の先頭に立って引き締めました。わたしのまわりに神々しい光が照り輝いています。宴席上ではたくさんの人々がただふつうにわたしを称賛するのならいいのに、わたしを褒めそやし、違う鳥のように別な鳥のようにわたしは皆と一緒に謡い踊りました。

第11章 結ばれる一族

11-1 親類となり、飲み食いし合う

さて、いまはもう宴たけなわまで進んで来ました。わたしの婚約者は杯を高々と掲げてイヨチ姫を呼びました。イヨチ姫は本当に驚きましたが憤み深いものだから、膝まずき這うように進んで行って、杯の下に身をかがめ杯を受け取りました。杯の上をなでさすりながらわたしの婚約者はこう言いました。『これこれ、イヨチ姫神の淑女よ。p.182 われの言うことをよく聞いてください。このように色々わけがあってわれらは知り合った。心の一方でまことに神々のお陰であるとわれは考えて本当にわれは喜んだのです。刀や首飾りなどの家宝の宝をお礼に差し上げるよりも、何度も何度もわれが言ったようにいつまでも親類として義兄弟姉妹になって、飲み食いしあい仲良くして行くことが最もいいのです。本当のところは、わが可愛い妹がポンテセウ彦 わが義兄の煮炊きをしてさしあげるはずであったが、少々わけがあって、われが勝手にこのような考えを持っても神罰が下ることはないであります。それゆえわが義兄にこれからは煮炊きしてさしあげてください。』と p.183 おっしゃったから、イヨチ姫は本当に心から嬉しくてならないものだから、心の中でにこにこしながらその杯を受け取り、高くささげ低くささげて拝礼し、ほんの少し口をつけてから土産用に飲み残しました。

11-2 義姉と喜び合う私

育ての兄さまはわたしの婚約者の言葉を聞いてほんとうに喜んでいるものだから、腰のなかばまで深く曲げて妻を迎える承諾の礼拝をしました。イヨチびと神のようなお方もそれこそ本当に心からとても喜んでいることがはっきりわかり、何十回もの拝礼を重ねました。わたしも本当に泣いて喜びました。なんとまあありがたいこと！その上さらにあまりにも良すぎることはお互いに親しみ好意をもっていたお方を、もう今はまことの義姉になるそうです。本当にわたしは喜んで『お義姉さまあ』と言って p.184 義姉を抱きしめました。義姉はわたしを抱きしめ『妹よ』とあらためてまた撫でさすり合う挨拶を交わし喜び合いました。

11-3 クロラニびとの語り

ふたたびまたわたしの婚約者が杯を高々と掲げて、クロラニの若い女性を呼びました。若い女性は非常に憤み深いものだから、膝まずき這うように進んで行って杯を受け取りました。わたしの婚約者は再び杯の上をなでさすりながらこう言いました。『これこれ、クロラニ姫、神の妹よ。われの言うことをよくお聞きなされ。そなたらは神であるからまこと心根が立派であまりにも人間を好きになってくださったことをまことに心の底からわれは感謝するのであります。そなたらが神であっても、大きなわけがあって、これからはもう仲間になり味方同士になるのであるならば、神々の風習や人間のやり方はこのようなこと p.185 なので結婚し一緒に暮らすのだから、淑女ぶりを発揮して、イヨチびとたぐいまれなる勇者の煮炊きをしてお世話してください。こうして今こそ神の夫をそなたが持てば、何倍も数倍も幸福になるはずなのだよ』とおっしゃったところ、若い娘は本当に今まで経験がないほど(?)ほんとうに喜んでいるものだから、心の中でニコニコしながらその杯を受け取り、高くささげ低くささげて拝礼し、ほんの少し口をつけてから土産用に飲み残して下座に来ました。

11-4 喜び妻を迎えるイヨチびと

ああ、お可哀想に！イヨチびと神のようなお方はあんなにもまあわたしの行いのせいで、若者がひそかにわたしへの気分を害していることをそっと心の中で p.186 あわれみ可哀想にわたしは思ってそんな心配事があったのに、まこと神々のお陰でわたしと結婚することとは比べものにならないほどで、それより何倍も数倍も本当にこれこそお似合いのお顔お似合いのお姿であまりにも(?)お似合い(?)のご様子を見れば、たぐいまれなる勇者精神のいいお方にちががなく、神に守られている事情がはっきりわかりました。イヨチびと神のようなお方はその言葉を聞いて本当にも頭の上がぼっとはじけ散ったみたいに思ったらしくわたしには思われました。イヨチびとは腰なかばまで深く曲げて妻を迎える承諾の礼拝をしました。ほんとうに喜んでいる様子が一同に解ったから、今こそはじめてわたしもほっとしてフーッと息をつきほんとうに喜び、大いに安心し、 p.187 もう大丈夫だと思いました。神の若者も嬉しくてならないものだから、畏れかしこみつつ何十回

もの拝礼を重ねました。さらにまたわたしの婚約者は杯を高々と掲げてオタサム姫わたしの義妹を呼びました。わたしの義妹は膝まずき這うように進んで行って杯の下頭をさげて杯を受け取りました。わたしの婚約者は杯の上をなでさすりながら、『これこれ、わが可愛い妹よ。そなたが聞いたようにそなたが見たごとくこのとおりのわけで、これからは神のような方々と義兄弟姉妹になりわが一族になるそのことを本当にわれは喜んでい。人間のやり方や神々の風習ではこのようにして結婚するのだから、クロラニウクル神の若者と連れ添って立派な人間の作法や *p.188* 淑女ぶりでもって、煮炊きをしてさしあげるのだよ。その後で新婚用の別家を柵と一緒に美しく飾り付けさせて、そこにそなたたちを住まわせて（？）勇者をあてにし首領を頼りにして安心していること、われも本当に喜ぶのであります。』とおっしゃったから、わたしの義妹は本当に非常に喜んでいものだから、心の中でにこにこしながら受け取った杯を高くささげ低くささげて拝礼し、ほんの少し口をつけてから上産用に飲み残し下座に来てわたしたちは喜び合いました。クロラニウクル神の若者もほんとうに喜びが激しいものだから、何十回もの拝礼を重ねて妻を迎える承諾の礼拝をしました。

第12章 宴の終幕

12-1 私へと詫びるオタサムびと

一番最後に再びわたしの婚約者が杯を *p.189* 高々と掲げてわたしを呼びました。恐れかしこみつつわたしは膝まずきながら這うように進んで行って、杯の下で頭をさげてわたしは杯を受け取りました。わたしの婚約者は杯の上をなでさすりながら、『これこれ、わが可愛い妹よ。どんなにかまあ心の中でそなたはわれを恨んだりわが身をなさげなく思うことがあったのではないだろうか。何であれ全く極悪な神悪い守護神が現れてそなたに憑き（？）、それゆえあのようにただ言葉だけであったにしても、そなたが強情を張ってしゃべったことを今でもわれは忘れない。まこと可哀想なことをそなたにさせた（？）のだ。イヨチびとたくいまれなる勇者も気持ちの上ではまことにお気の毒で本当にお可哀想に思うが、戦いのやりかた戦さの方法とはこのようなものだから神々とはもとよりわれらすべてが *p.190* わが気持ちを ご承知なのです。もう今は神のお陰で（神の意志によって）何ごとでもわけがあり、それが判明してか

らこのように神でも義兄弟姉妹に持つことができる。あまりにも（？）神のご加護があり過ぎるこのような出来事は、われらすべてがよい精神を持っていたからだ。われらが拝む神々が急に振り向き急に見るのが無かったとしても、極悪な神たちがたとえどのようにありきたりの人間たちに悪戯しその力量を試しても、遅くはなつたがこのようにいいあんばいに収まった。それゆえそなたがわれを怒っていたとしても、勘弁して許して先祖の言葉なのだから、淑女の心構えアイヌのしきたりを見事にやりこなして、これからはもう先祖の家の奥深く *p.191* に落ち着いて居て、煮炊きをしてわれの世話をしてくだされ。』とおっしゃったから、おおあわれ、ああ何と！極悪の神から悪い術をかけられたせいで、わたしたちが互いに妬み憎み合うことをさせられ、かわるがわるあのようなふりをさせられていたことを今ようやくそのわけをわたしが解ったのであって（？）、そのうちわたしの婚約者がつまらない取り柄のないわたしのような者にお詫びの言葉をおっしゃるから、もう少しで『兄上さまあ！』とわたしは言って兄さまの両腕の間へ今にも飛び込みそうになり、顔面に涙が滝のように流れました。

12-2 兄から受ける酌

兄さまはこの大きさが溢れんばかりになみなみと酒を注ぎました。恐れかしこみながらわたしは杯を受け取って高くささげて拝礼しほんの少し口をつけてから上産用に飲み残しました。振り向いて *p.192* 見ると、おお何と、ああ可哀想に！わたしの兄さまもわたしと違う考えをお持ちであったならいいのに、まるでわたしと同じ気持ちなものだから、わたしの態度やしぐさを見ると、たくいまれなる勇者の目元が見る見るうちに潤んできて涙があふれ出てきました。杯をわたしが持って来たときに初めて間近にわたしを見たものの、ただふつうにわたしを称賛するのであるならいいのに、わたしの顔は直視せず日を伏せていて、人目と炉との間の座席にわたしは来ました。わたしの兄さまが今こそはじめてほんとうに心から心底本当にわたしを想いわたしを大変愛してくださっていることがはっきりわかったから、わたしはすっかり安心しきって萎れた草のように *p.193* パタッと倒れ伏し、それと同時に腕の力も（？）抜けていって（？）何をする力も失せてし

まい、わたしはいくつもの涙たくさん涙をはらはらと流しました。

12-3 兄の謡う酒盛り歌

それからもう今はわたしの兄さまがすべきことはすべてやり終えたものだから、すっかり安心し本当に喜んでいるものだから、上座に出てきて、兄さまが謡う酒盛り歌はその喉奥で節を面白くうねらせ、唇の上から神が昇天する時のように美しく響き合い、横座から下座へと何度も同じ動作を繰り返し幾度も繰り返し繰り返し次々と舞踏が重ねられ、飛び跳ねて踊るその音刀鏝が触れ合う音は金のひびきのように澄んだ高い音を響かせています。婦人たちは二人三人とわたしの兄さまの後ろについて踊り、一緒にフムッと上げる氣勢の声は元気よくにぎやかで騒がしい。

12-4 婚約者の美しき歌舞

p.194 宴席上では族長たちがわたしの婚約者の方を見ながら手拍子を打ち、一斉に挙げるおたけびと一緒に挙げる鼓舞の声を差し伸べ合っていて、まったく面白く心楽しくわたしは感じました。まあ驚いた！わたしの婚約者の美しく立派なご様子はまこと祀られて天に還っていく神飾り祀られて昇天するお方ようです。わたしの婚約者が舞踏を終えると、交代して今度は育ての兄さまやイヨチびと神のようなお方も代わるがわる交代して踊りました。どちらが器量においても衣装においても優り劣りするでしょうか。優劣つけがたい神のように両方とも同じくらいいたいそう立派で、わたしたち一同楽しい思いをしました。

12-5 宴の終わり

わたしの兄さまたちは一口飲んだ盃をたえずわたしに差し出します。イヨチびと神のようなお方も口をつけた盃が空にならないようにわたしに差し出し、杯の上をなでながら、p.195 たくさんのいい言葉幾つものいい言葉を言ってくださり、本当にわたしはほっとしました。育ての兄さまもたえず盃をわたしに差し出し、首骨も見えなくなるほど何度もうなずきながら、幼いころのように何度も何度もたくさんの笑顔を見せながらうなづき、何度も何度もわたしをなでさすり、たくさんのよきこといくつかのよかるべきことをわたしに教えました。

イヨチ姫わたしの義姉もクロラニ姫も義妹も全員が重ね重ねくり返し(?) 飲み差しの盃を与えられたものだから、飲み差しの盃を受け取って(?) (?) 今はもう夜明けに近づきました。一座の人々は何十回もの拝礼をたくさん重ねて大いに感謝し、一同が帰宅し終えました。その後で本当にただ一族だけになりました。

12-6 女性だけの語らい

男性たちとは別々に、女性陣 p.196 のわたしたちはまた別になって、たのしい酒宴おいしい食事をし、食べながら良いことも悪いことも話し合いました。たくさんの冗談や笑えるような出来事を話し合いました。なんとまあ、育ての兄さまやイヨチ姫わたしの義姉は美しいご様子だったのでしょうか。本当にそれこそお似合いのお顔お似合いのご夫婦です。イヨチびと神のようなお方とクロラニ姫もまた同じ様にそれこそ同じくらいのご器量お似合いの美貌です。クロラニウングル神の若者とオタサム姫もまったくお似合いのお顔お似合いの器量であること、とても素晴らしく、かわるがわるわたしは感心して眺めていました。なんとまあ族長たちと勇者たちは好意を抱き合い親しみ深く歓談していたことでしょうか。

一緒にフムフムッと氣勢の声を上げ手拍子を打っています。p.197

第13章 夫婦となる二人

13-1 新築の祝い

二日ほど本当に心の底からわたしたちは歓談し合い、それからわたしの婚約者がこう言いました。「これでもうクロラニウングルわが義弟どのが住まうべき館をわれらは手伝い合って造り終えたから、一安心することにしよう。」とおっしゃったから、族長たちは皆いっせいに『なるほど成る程』と言って起ち上がりました。わたしたちもほんとうに喜びながら家の外に出ました。わたしの婚約者はまた自分の村のかみてから下端に向かって声高に呼びかけました。いつものとおりの一家のあるじたちも婦人たちもなんと聞きわけがよかったことでしょうか。またたく間に大勢のひとたちが集まり出てきて、それから笑いながらあちこち駆け回って、木を伐る者は木を伐り、カヤを刈る者は萱を刈りました。それから木を削る者や木に刻み日を入れる者は猛烈にガラガラメリメリ、コツコツコツ。萱を束ねる者は萱を束ねて p.198

元気よくサッサッサッと皆は忙しく立ち働いています。二日三日たつと、それこそ全く新しい館全く新しい山城が重なり立ち、館の内部や外観も美しく飾られ、家の中にはよりぬきの容器で飾りつけてあります。新しいイナウで飾られた館の中で新築祝いをするので、いささかの御神酒醸して様々な団子をたくさん作ってから新築祝いをし、さらにまた一族同士でも喜び合いました。

13-2 三人きりになる

二日三日ばかりしてから育ての兄さま夫妻とイヨチびと夫妻は共に喜びながらすっかり安心して帰って行きました。その後にわたしたちの住まいで今度こそようやくわたしの婚約者神のようなお方とたった二人きりで、他に誰ひとり居ないはた目無しの状態に *p.199* なりました。わたしの婚約者はわたしの肩を押さえてしっかりつかみ、『かわいい妹よ』と『心臓よ』と言いながら、わたしを抱きしめました。そうしながら言葉をはさんでこうおっしゃるには『おおあわれ、ああなげない。あんなにもまあこれまでの生涯で心の中で（陰ながら、密かに？）わが身を純潔に保ちながら、さあ早く一人前の男や一人前の娘になってよい見合い落ち着いたお見合いをしてから、結婚して一緒に暮らそうとばかり待ち望んで日々暮らしていたのに、全く極悪な神まことに悪い神が嫉み憎んだことであつたにしても、まったくとんでもないことをわれらにしたことでまことにそなたが可哀想でならぬ。今こそそなたの無事をお喜び申し上げますぞ』と言って、何度も何度もなでさすり、わたしのひたいの上に接吻してくれました。たぐいまれなる勇者がただふつうにわたしを可愛がるのであるならいいのに、*p.200* わたしのからだの上にたくさんの熱い涙数々の熱い涙をはらはら落としました。わたしの方からもまた今度こそ「お兄さまあ！」とわたしは絶叫し、わたしの泣き声が響きわたりました。兄さまの衣の裾にわたしは取りすがり、兄さまのひざがしらや手の甲をわたしはなでさすりながら、わたしも今まで人殺しの凶悪なニッネカムイの呪術のせいで、かくかくしかじか自分の心も悩まされたことだのをすっかり話し、「もうこれからは何も恐れることは一つもなく、真の結婚をし、真の夫婦になって、先祖の山城の奥深くでぐっすり眠って、上流から下流を治めることにしましょう。」とお互いにたくさんのいいこといくつものいい言葉や良

いことも悪いことも肝に銘じ合って二人とも一安心しました。

13-3 婚約者との食事

それからわたしは下座に行き、*p.201* 水をぎあぎあぎあぎあ流して手をすすぎ、美しい小鍋の取っ手の元の方から水をかけて洗ってから鍋に水を入れ、炉の上にさっと掛け、炉鉤にかけた鍋の下をわたしはフウフウ何度も吹いてわたしは火を起こしました。しまっておいた精米を鍋の中にザァと空けると、この小鍋に泡が煮え立ってきて、美味しいご飯がおのずと炊きあがりました（?）。おいしそうなお飯をわたしが籠でもってかき回すと、よく炊きあがったご飯が籠の上で湯気がふるえ湯気が横にたなびくのをわたしは鍋に蓋をしてそのまま蒸らしておきました（?）。少し経つとわたしは鍋を炉から降ろし、薄造りのお膳に薄造りの椀を取り出して来て（?）椀の中へ小さく盛って椀の外へ大きく盛ってうやうやしく高くわたしは持ち上げ、畏れかしこみつつ自分の上座にいるわたしの婚約者にわたしが捧げたなら、婚約者は杯を受け取って高くささげ低くささげて拝礼しました。

13-4 真の夫婦となる

それから *p.202* ゆったりしたしぐさで食べながら、わたしは料理が上手だといい、上手にできた食べ物をうまいうまいと舌鼓を打って食べてから、その高盛の残り半分をわたしに差し出しました。畏れかしこみつつわたしは杯を受け取って高くささげ低くささげて食べました。なんとまあ、わたしの婚約者の結構な分け前は美味しかったことでしょうか。本当に美味しくわたしは食べ終わりました。それから今こそはじめてわたしの婚約者の後ろの座にわたしは座り、正式に妻となりました。わたしの夫はそれこそ心臓の先にわたしを入れるほどわたしを可愛がり、かわるがわるわたしたちは愛し合いました。わたしの夫をわたしは上から下まで大事にお世話したから、なおさらわたしに笑顔を見せて「わが愛しい妻はなるほどなあ！危うく極悪の神から見込まれた者だけあつて（?）、器量がいいばかりか何でも上手にできることには驚いたなあ！」とおっしゃいました。またある時は子供を抱きしめ *p.203* 赤ん坊を抱きしめるようにわたしを抱きしめ、本当にわたしは嬉しく思いました。

第V部 私の生涯の語り

第14章 一族のウバシクマ

14-1 平穏無事な暮らし

そのうち他所にいるわずかな夫婦たちもただふつうに仲が良いだけならいいのに、家を突き抜け山城を突き抜けて朗らかに笑い合う声が聞こえるから、本当にわたしは安心しました。ポンテセウの育ての兄さまご夫妻もイヨチびとご夫妻たちも幸せに仲良く暮らしていると言う声が神々の評判となって、いくつもの村々たくさん村々を越えていっせいに聞こえてきました。それと同時にまたわたしたちも評判になって、ポンテセウ村で酒宴がある時はそこにわたしたち全員が酒宴へ呼ばれて行って会見し、イヨチで酒宴があると、またそこにわたしたち全員が招かれ喜び合いました。わたしたちの館で酒を造ったときは一族すべてが *p.204* やって来て招待客になり、いつもいつもすこやかに平穏無事にわたしたちは暮らしていました。お互いに酒宴に招き招かれ合い、それ（酒宴への往来）で疲れるほどでありました。

14-2 談笑の絶えぬ日々

わたしの夫は神の婿殿をいつも本当に可愛がって談笑しながら連れ立って沖でとった獲物をどしどし陸へ持ち帰り、山でとった獲物をどしどし里へ持ち帰り、御馳走ばかり脂身ばかりお団子ばかりご飯ばかりを食べていました。わたしの義妹は本当にわたしと仲が良く、一日の内に何度もわが家に出入りしてうそばなしやほんとの話をかわるがわるおしゃべりしあって、たくさん笑い声や話し声で毎日毎日家の中がにぎやかで騒がしい。その合間にわたしたちは畑を耕して幾つもの倉たくさん倉をいっばいにして、さまざまな野草雑草を皆でいっしょに *p.205* 料理し、たっぷりいただきました。

14-3 子を授かる

もう今は義妹と揃って子供が生まれました。わたしの子供たちは元気に育って、もう今はみんな大きくなりました。わたしの子供たちは男の子も女の子もみんな、わたしたち夫婦が若い時はあんなにもまあ、器量が良かったように、わたしたちによく

似ているものだから、どちらに優劣をつけられるでしょうか。皆まさしく神のように美しい様子でした。

14-4 親孝行な子ら

男の子たちの先に生まれた者はわたしの夫を手助けして、山仕事に行く時でも沖漁に出る時でもお互いに手助けし合い、娘たちの先に成長した者たちはわたしを手助ってくれます。もう今は全員がわたしのそばに来てわたしを手伝い、何かわたしが手を出そうとするとそれを断ってわたしに親孝行しました。

14-5 年若い、孫に囲まれる

やがて息子たちは *p.206* 皆妻を迎え、娘たちも皆結婚し、今はもうたくさん孫がわたしたちにいます。わたしたち夫婦は今はもう年若い足腰が弱り、静かに家の中にいて、孫たちを可愛がりました。同じようにまたわたしたちの兄弟姉妹も共に揃って子供たちや孫たちともども幸せに暮らしている評判をお互いに聞きながら、はるか遠いポンテセウ村やイヨチ村から甥たちや姪たちの一軍がみな揃って、まるでわたしたちが持っていないみたいに珍しいものの畑の作物だのどっさりわたしたちの所へ背負って持ってきて、みんなをせいっぱいわたしたちは可愛がり、にこにこ笑顔を見せてわたしたち夫婦は喜び合いました。お返しにまたわたしたちの息子や娘たちがいい獲物やよく出来たものをポンテセウ村やイヨチ村へ背負って、叔父さん夫婦たちの *p.207* ご機嫌伺いに出かけました。わたしたちはもはや遠くまで歩けないけれど、わたしたちの子供たちは行き来しています。それでいつもお互いの事を聞きながら暮らしていました。

14-6 語り継がれるウバシクマ

初めの頃わたしたちがしたように、何度も何度も酒を造ったときはお互いに親戚身内と一緒に遊びに行き行って本当に仲が良く、もう今は共に揃って人間界を喜んで(?) わたしの子供たち孫たちを全部呼び集め、かくかくしかじかのことがあってこれまでの生涯に悪狐極悪の奴が危うく何かわたしに憑いて、わたしの魂を奪おうとしたけれども、神の霊力の方が優っていたこともあり、まだそのほかにわたしたち全員が裕福で身分ある男性や族長の精神、優れた婦人の精神神の精神を *p.208* 持っていたから、神の

ご加護があって、みんな揃ってこの世の中にいない前に倒れることも後ろへ下がることもできないほど裕福な暮らしをしながら、幸せに暮らしている一族がわたしたちで、そこから生まれたのがあなたたちなのです。それゆえしっかりと神のよいウバシクマ（伝説や由来譚）をいつまでも決して忘れずにお互いに仲良くお互い大切に世話をし合うならば、何の悪い人を殺して食べる凶悪な神が悪さをしたとしても、神が守ってくださって、このように年老いるまで神がお守りくださるでしょうよ』と先祖の話を言い伝えて神のような死に方りっぱな老い方を共に揃ってして、これこのように生涯を終えようとしてわたしは事実あった話をしたのですよ」とポンテセウに住む女性が自分のことを謡ったということです。

（了）